

授業改善等に関する報告書（2020年後期）短期大学部

授業アンケートへのフィードバック

平成 28 年度より、学内で使用されている LMS (Lerning Management System) manaba 上で学生が回答した授業アンケート内容に対し、教員がコメントする形式を採っている。

次ページ以下に、それらの「授業アンケートへのフィードバック」をまとめて掲載し、授業改善等に関する報告とする。

[2020（後期）日本語コミュニケーション学科] 授業アンケート結果へのフィードバック

コース名	教員名	教員からのコメント
ライティングゼミa	居郷 英司	この授業は今年度から新設で、なおかつコロナ禍のため前期の予定が後期となり、さらにオンライン授業となった。そのため、授業内容の変更も必要となり、学生も混乱したのではないと思われる。質問を受けられず、一方的に講義する内容となってしまったが、一応の目的は果たせたように思われる。
日本語のしくみ	大塚 みさ	月曜1限のメディア授業でいかに楽しく学んでもらえるかを心がけてきたので、「授業の内容と方法」で高く評価してもらえたことをうれしく思いました。自由記述欄からは、毎回の授業と3回のレポート課題に一人一人が主体的にかつ楽しみながら取り組んだことで知識や関心が深まったことが伝わってきました。高い満足度が得られたのは、こうしたみなさんの学びの姿勢によるものだと思います。今後も、教員と受講生とでよい授業作りを行うという姿勢を大切に、さらなる改善につとめていきたいと思ひます。
基礎ゼミ①	大塚 みさ	ほとんどの項目で平均を上回っており、特に「自身の成長が実感できた」と答えた学生が多かったことをうれしく受け止めました。前期から引き続き要約やレポート、プレゼンについての学びを深め、その成果を他の科目でも発揮できていることが自由記述欄からわかり、みなさんの主体的な取り組みが授業の満足度につながったことを確信しました。次年度も、受講生の主体的かつ協動的な学びを実現できる授業運営ができるよう、工夫を凝らしていきたいと思ひます。
基礎ゼミ③	高瀬 真理子	こちらの授業は双方向で、要約ドリル付き、もう一つの必修は対面授業でした。入学式から前期の間は、ろくに大学に通えない状況でしたので、後期になって、この対面授業を有効活用したいと思ったことから、二科目合わせると、一通りにはなるのですが、やりくりをしたために、逆にシラバス内容との関係で混乱したかもしれません。ただ、対面授業の重要性和私の悪戦苦闘は伝わったようで、そのことについては、ありがたく思ひます。
基礎ゼミ④	西脇 智子	前期の「実践入門セミナー」に連動する後期の新しい科目に取り組み、多くの項目で平均を上回ることができました。資料のわかりやすさなど評価を得られた部分については、次年度以降も工夫して取り組んでいければと思ひます。
ライティングスキルb	鹿島 千穂	今年度初めて開講した科目でした。全15回ともZoomによる双方向授業での実施となりましたが、出席、ディスカッション、課題の提出等、よく頑張っていたと感じます。そのせいか、「授業を通して自身の成長を実感できた」という学生が多かったことを嬉しく思ひます。次年度は対面授業の予定ですが、今年度の内容をさらにブラッシュアップさせて取り組むつもりです。
点字の世界	西脇 智子	オンデマンド授業という新しい授業方法に取り組みましたが、多くの項目で平均を上回り、わかりやすさや授業に対する自己評価が高かったことは大変嬉しく励みになりました。高評価を得られた部分については、次年度以降も工夫して取り組んでいければと思ひます。
女性文学	高瀬 真理子	双方授業でしたので、普通に講読するというのでは、なかなか伝わらないし、対面のように模型を持ち出すこともできない。とにかくデータにしてPCの中に入れたものだけがすべてというのは、かなりしんどかったです。しかし、文学を可視化するにはどうすべきか、新たな課題を見出したように思ひます。対面では見落としてしまうような体験でした。
コミュニケーションと心理	大塚 みさ	ほぼすべての項目で平均を上回ったこと、特に「自身の成長が実感できた」という声が多かったことをうれしく思ひました。成長の実感に関する自由記述として、知識の習得だけでなくグループワークを通して学んだことが具体的に書かれており、みなさんの意欲的な取り組みの様子が伝わってきました。次年度は、グループ活動をより有意義に進められるような工夫を凝らしていきたいと思ひます。

[2020（後期）日本語コミュニケーション学科] 授業アンケート結果へのフィードバック

コース名	教員名	教員からのコメント
情報リテラシー応用	久保 ちづる	<p>「Ⅰ. あなた自身について」の結果を過去のデータと比較すると、自ら向かい合う必要があるオンデマンド授業の方が対面授業よりも学修時間は増え、理解度もわずかながら上回っていました。</p> <p>「Ⅱ. この授業の内容と方法について」では、説明・双方向授業・配布資料について満足していない割合が16.7%または33.4%ありました。これらの原因は主としてコミュニケーション不足によるものではなからうかと思っています。オンデマンド授業ではZoomを質問対応の目的で利用することに限定されたため、Zoom機能を十分に活用できなかったことは残念でした。</p> <p>「Ⅲ. 全体について」では「この授業を通して自身の成長を感じた」と「総合的に判断してこの授業に満足した」とがともに回答者全員の100%であったことから、皆さんが積極的に課題に取り組み、自身の成長を実感して満足したことが分かりました。</p>
基礎ゼミ②	佐藤 辰雄	<p>「基礎ゼミ」という科目の性格上、文章をしっかり理解する学修を基軸にした為、個人差が出やすかったが、それでも努力した人が多かった事は特筆に値する。高度な文章の要約作業を通して物事を多様に考える力と文章力が身に付いたと実感する学生が少なからずいた。前期と比べても実力は向上したとデータも語っている。</p> <p>グループ発表をする「あとがきを追う」シリーズでは、発表をする自信がついた、あとがきに注目するようになった、読書をするようになったとの自己評価が多数出された。</p> <p>Q7の教員の説明に関する設問については、得点が低めであった。具体的な問題点を総括して、来期に向けて改善したい。</p>
自己表現法①	大塚 みさ	<p>クラスの7割が教室、3割がZoomで受講するという初めての授業形態でしたが、すべての項目で平均値を上回る評価をうれしく受け止めました。しかしこれは、受講生のみ皆さんの真摯な取り組みの賜物に違いありません。特に「自身の成長を感じた」という声が多かったこと、また自由記述から授業での学びが就職活動という次のステップに着実に繋がったことが分かり、うれしく思いました。</p> <p>次年度も、受講生のニーズに応える授業を展開していけるよう努力したいと思えます。</p>
ライティングゼミb	居郷 英司	<p>本年度新設の授業であり、前期のライティングゼミaを踏まえての授業の予定であったが、コロナ禍のためゼミaが後期開講となり、a・b同時進行となった。そのためシラバスも変更せざるを得なくなった。しかし、当初予定していた作品集作製まで、まがりなりにも行うことができた。来年度は、この経験を生かしたよりよい授業を行いたい。</p>
物語の世界	佐藤 辰雄	<p>課題は、授業内容に関わる教員の問いに200字で答える形式を中心とした為、力量差が大きく出た。回数をこなす毎にまとめ方が旨くなったと実感する学生も少なからずいたのは頼もしいと感じられた。</p> <p>Q2の予復習が他の科目よりもやや多いところに、課題に対する苦勞がにじむようだ。その意味でQ11の成長実感が少し低いのが残念である。Q15の授業満足度は平均以上なのに、Q14の自己採点が3.71だったが、教員からの評価はそれよりも低かった。</p> <p>アンケートでは殆どの学生がコメントを具体的に寄せていたのが印象的であった。</p>
データ分析入門	河野 康成	<p>この授業については、オンデマンドという授業形態でしたが、パソコン操作だけに限ると、オンデマンドだけではなく、双方向や対面を取り入れた方が良く考えている人も多く見受けられます。実際に、対面、双方向、オンデマンドの順で、操作性の効果は高いと思われます。しかしながら、パソコン教室とは異なり、大学の授業では、操作以上に、将来のために、考える力が必要となります。その意味においては、対面や双方向よりオンデマンドの方が身に着きます。</p> <p>最も多かった意見が、優しく丁寧に解説してほしいということでした。これは、全大学で同じことを言われています。優しく丁寧に解説すれば、授業評価と同時に、学生の満足度も上がりますが、学生のためにはならないとの信念を持っています。高校生までとは異なり、受動的ではなく、能動的に勉学に携わってほしい気持ちがあります。それには、少しハードルが高く、それを乗り越える力を備えてほしいと期待しています。</p> <p>最後に、データ分析についてですが、分析については入門的な内容でした。しかし、本年度は、コロナを対象としていたため、難易度が上がってしまいました。逆に言うと、簡単にコロナの分析ができるのであれば、今頃収束していることとなります。当初は学生さんの心理側面を考慮して迷いましたが、社会に目を向けるという点では、このテーマにして良かったと思えます。</p>

[2020（後期）日本語コミュニケーション学科] 授業アンケート結果へのフィードバック

コース名	教員名	教員からのコメント
企業と情報	板倉 文彦	<p>本科目は受講生の半分近くが1年生であり、企業と情報との関係という学生の身からは少し縁遠い話を、オンデマンド授業でどれ程伝えられるか心配する授業であった。</p> <p>しかし学生の皆さんが意欲的に受講してくれたおかげで、評価的には平均を上回る結果となった。</p> <p>例年「予習復習時間」は平均を下回る傾向にあったが、今年は上回ることとなった。これはmanabaでの復習課題を課したことが影響していると思われる。次年度以降対面授業となった場合でも、manabaを併用する手法を取り入れることでより改善が出来る可能性があることを知ることが出来た。</p>
自己表現法②	佐藤 辰雄	<p>12回にわたる難しい漢字と四字熟語の小テストは、毎回20余問を出題したが、しっかり予習をする学生が多く、各回とも満点学生が必ず片手以上いて、8~9割正解の学生も6割前後かそれ以上だった。</p> <p>更に軽重2回の発表準備(個人・グループ)が授業外の学修時間を必要としたわけだが、Q2予復習時間が0.96と平均より少ない点が意外であった。</p> <p>Q14の自己採点が3.79と高めであったが、実際によくできていた学生が多かった。</p>
自己表現法③	高瀬 真理子	<p>この科目では対面授業ができたので、グループ活動など、基礎演習の内容も混ぜて、対面で仲間と意見交換することの重要性にポイントを置きました。入学式もないままに前期を過ごした学生たちには、この授業が貴重な体験になったことが分かります。</p> <p>いろいろと盛り込んだことについて、戸惑いがあったかもしれません。</p>
自己表現法④	西脇 智子	<p>教室での本来の演習を多く取り入れた授業展開が十分にできなくなりましたことはとても残念に思っております。工夫した資料などのわかりやすさに評価を得られ励みになりました。評価を得た部分については次年度以降も工夫して取り組んでいければと思います。</p>
日本文学の歴史 d 現代	高瀬 真理子	<p>対面と双方向と両方が存在し、かつテキストからもう一つ発展させる資料も、文学事典中心となる。</p> <p>プロレタリア文学運動などは、あまりに複雑なので、年表なども作って工夫をしたが、さらに一層、目に優しくないといけないのかなと思う。</p> <p>読まなければ分からない世界といろんな文芸思潮が絡まり合って流れる時代をどう整理してみせるのか、まだまだ課題は残ります。</p>
プレゼンテーション入門	鹿島 千穂	<p>対面とオンデマンドを組み合わせる授業を実施しました。対面では、プレゼンテーションの理論学修と発表を行い、オンデマンドでは配信された資料を参考に発表の準備を進めてもらいました。時間をかけて準備し、クラスメイトと教員の前で発表を行い、フィードバックを得て振り返りをするというプロセスを通して、学びを深めることができたのではないのでしょうか。「この科目を通して自身の成長を実感できた」「この科目をさらに専門的に学びたい」という学生が多かったことを嬉しく思っています。授業で学んだことを、ぜひ今後の社会人生活や学生生活に活かしてください。</p>
日本語コミュニケーション入門	西脇 智子	<p>オンデマンド授業という新しい授業方法に取り組みましたが、平均を上回る項目もあり、工夫したわかりやすさを評価していただきましたことは大変励みになりました。評価を得た部分については、次年度以降も工夫して取り組んでいければと思います。</p>
日本語を教える b	久池井 紀子	<p>この授業は本来、お互いにやり取りしながら考えを深めていく形式で行うものでした。それを、今期はオンデマンドで一方向的にせざるをえませんでした。授業資料の理解や課題の提出など、皆さんもさぞかし大変だったと思います。ですが、この経験はこれから皆さんが社会に出て、新しい時代を切り拓いていくときに必ず役にたつと思います。早く笑って思い出せる時代になってほしいですね。</p>
詩歌の世界	宮木 孝子	<p>この授業での目標は、近代詩歌に親しみ、言葉に関する感性を磨いてもらうことでしたが、多くの方がそれを達成してくれました。さらに専門的に学びたい方も10名いて、嬉しい限りです。授業の方法としてオンデマンド型が適しているが第1位だったのは意外でした。それから、音声の大きさと、コメントシートの返信に関しては課題が残りました。改善に努力いたします。どうぞ、心に残った詩への感動を忘れずに、豊か言葉をもつ人になって下さい。</p>

[2020 (後期) 日本語コミュニケーション学科] 授業アンケート結果へのフィードバック

コース名	教員名	教員からのコメント
日本文学の歴史 b 中近世	佐藤 辰雄	課題は、授業内容に関わる教員の間に200字で答える形式を中心とした為、力量差が大きく出た。Q3の履修動機について受動的といえる回答が3分の1に及んでいた。 Q2の予復習が1.15と他の科目よりもやや多いところに、課題に対する苦勞の痕跡が残るように感じられた。 Q11の成長実感が3.90と低めであったが、Q14の自己採点が3.70と高めであった。
情報と社会	板倉 文彦	本科目はオンデマンド授業での実施となった。 評価については、授業進行や資料、説明の分かりやすさについては平均を上回る評価であった。しかし、総合的な満足度や自身の成長に関する項目においては平均値を下回っており、学生の皆さんに授業内容が伝わり切っていないかかったものと分析している。 この点を反省し、今後もオンライン授業となるようなことがあれば、改善を施していきたい。
ヴォイストレーニング	鹿島 千穂	今年度初めて開講した科目でした。感染症対策をとりながら、対面で実施できて何よりでした。 受講生の意識が高く、「発声・滑舌練習」「原稿読み」「朗読ナレーション実践」等、毎回しっかりと取り組み、成長を見せてくれるので、教員としてやりがいがありました。期末発表の「ラジオ番組を作ってみよう」は少々ハードルが高いことが懸念されましたが、最後は各自の個性あふれる立派な発表が行われ、感心しました。「授業を通じて自身の成長を実感できた」「この科目をさらに専門的に学びたい」という学生が非常に多かったことを、嬉しく思っています。 次年度以降は、今年度の内容を踏まえつつ、学生が楽しみながら成長できる授業ができるよう工夫したいと思えます。
ビジネスコミュニケーション	板倉 文彦	本授業は3/4が対面で実施された。 評価については、概ね平均を超える評価を得たが、授業進行のスピードに関しては平均値を下回った。この項目の責は教員側にあるもので、今後の改善項目になることを認識できた。 いずれにせよ、本授業は新規開講科目であったため、学生の皆さんの身になるか心配であったが、評価結果からまずは順調にスタートが切れたことが分かった。
デジタルメディア	大倉 恭輔	いろいろと視聴覚資料を準備しましたが、どうだったでしょうか。 音楽と映像に話題を絞りましたが、わからない部分があったのなら、積極的に質問をしてもらいたかったところです。
卒業研究 b⑥	大塚 みさ	何よりも全員が「自身の成長が実感できた」と回答してくれたことをうれしく受け止めました。2年間の集大成である卒業研究に、一人一人が真摯に取り組んだ様子が伝わってきました。自身の成長に関する自由記述では、自身の努力による成長に加えて、他のゼミメンバーとの協働学習による成長についても書かれており、最後の学期に理想的な学びができたことに感嘆しました。 次年度も主体的かつ協働的な学びを実現できるゼミ作りに努めていきたいと思えます。
書籍製作	居郷 英司	アンケート結果を見ると、授業の目的はほぼ達成されていると思われる。それぞれの課題を各自が自己の考えで進めていく授業内容であるため、個別の質問に答える時間が取りにくいきらいがあった。
卒業研究 b①	佐藤 辰雄	「卒業研究 b」の授業は前期の「卒業研究 a」を受けて、卒研レポートをまとめる為の指導が中心だった。2回の重い中間発表の他に細々とした指導を行ったが、中心は論の深化と組立方であり、引用の仕方や注付けにも気を配らせた。実行できた学生とそうでない学生とでは、レポートの出来にも差異が見られた。 アンケートに答えてくれた学生は恐らく優秀なレポートを完成させた層に違いなく、Q2の予復習が他の科目の場合より極めて多く、Q14の自己採点も4.5と高い点はその自負の結晶に他なるまい。
卒業研究 b②	高瀬 真理子	前期が双方向でしたので、製本ができず、後期はこの製本作業で皆苦勞し、後期のコンテンツもあるのに非常に苦勞しました。 せつかくの合評の時間も取れませんでした。 意見は、manabaに入れて、みな助け合って頑張っていました。 思いがけないし寄せにも関わらず、みなで力を合わせて乗り越えたことについては、良かったと思っています。

[2020（後期）日本語コミュニケーション学科] 授業アンケート結果へのフィードバック

コース名	教員名	教員からのコメント
卒業研究 b ③	大塚 みさ	<p>ほぼ全員が「自身の成長が実感できた」点について「とてもよくあてはまる」回答してくれたことを、大変うれしく受け止めました。それに関する自由記述からは、一人一人の真摯な取り組みが大きな達成感につながったことが実感されました。また、独自設問で尋ねた「他のメンバーの発表を聞いて勉強になったか、刺激を受けたか」についてもほぼ全員が「とてもよくあてはまる」と答えており、協働学習の成果が感じられました。次年度も受講生の主体的かつ協働的な学びをサポートできる授業を目指して努力したいと思います。</p>
卒業研究 b ④	板倉 文彦	<p>今年のゼミは、対面受講者とオンライン受講者が混じる中での開講となった。そういった制限の中で可能な限りPBL（グループワーク）を取り入れていったが、例年の状況には及ばなかったのではないかと感じていた。しかし、学生の皆さんの評価は全ての項目で平均を超える評価となっており、制限のある中でも成果を実感頂けたことに安どしている。この結果は学生の皆さんの意欲に依存するところでもあり、お互いが協力した成果と分析している。</p>
卒業研究 b ⑤	鹿島 千穂	<p>前期はオンデマンドとZoom双方向を組み合わせたメディア授業でしたが、後期は感染症対策をとりながら対面授業を実施できて何よりでした。自身の発表だけでなく、ゼミのメンバーの発表にもしっかりとコメントし、お互いの発表をより良いものにしようとする姿勢が素晴らしかったです。就職活動や進学準備をしながら、それぞれが興味ある研究テーマを掘り下げ、立派に研究レポートを完成させることができました。アンケートに回答した全ての学生が「この授業を通じて、自身の成長を実感できた」と感じていることを大変嬉しく思います。コロナの影響で、学生への指導がmanabaの個別指導コレクションのやりとり中心であったことが、唯一の心残りです。</p>